

**宮川長春** 天和二年(1682)生、没年月日は一説に宝暦二年(1752)11月13日

尾張の宮川村の産と伝える。肉筆画のみを描いた美人絵師。作画期は元禄(1688-1704)末から没年近くまで。画業の中心は、美人図・美人風俗図の掛幅と画卷。屏風絵もある。土佐派の門に学び、菱川師宣の風を慕うと伝えるが、狩野派門人説も提唱されている。優麗暢達にしてこぼれんばかりの愛嬌と色香を漂わせるのが長春美人の特質。モデルの女性はほとんどが吉原の遊女と推定される。師宣に比べて人物は大きめで、師宣がどちらかといえれば風俗事象を俯瞰的に取り上げているのに対し、長春は人物により肉迫して描きあげている。師宣の風俗図の主題を限定し、人物を拡大し、濃密な色香を加えたのが長春の特質。類型的図様の多いのも特徴。主として富裕な階層の需要に応え、上質な絵具を用い、得意の図様を中心に制作した絵師と位置付けてよいのではないかと思われる。

### 長春の画卷

一、署名「日本繪宮川長春圖」・印章「長春之印」(白文方印)

(一)「江戸風俗図巻」絹本着色二巻 城西大学水田美術館蔵

(二)「四季江戸風俗図巻」絹本着色一巻 出光美術館蔵

(三)「江戸風俗図巻」紙本着色二巻 大英博物館蔵

(四)「街頭風俗図巻」紙本着色一巻 ジェノヴァ東洋美術館蔵

(五)「路上風俗図巻」紙本着色一巻 ウェストン・コレクション

(六)「風俗図巻」紙本着色一巻 東京国立博物館蔵

(七)「遊楽図巻」紙本着色一巻 ボストン美術館蔵

(八)「歌舞伎風俗図巻」紙本着色一巻 ジェノヴァ東洋美術館蔵

(九)「雑劇図巻(芝居小屋図)」紙本着色一巻 フリーア美術館蔵

(十)「室内遊楽図巻」絹本着色一巻 泉屋博古館蔵

(十一)「十二ヶ月祭礼図巻」紙本着色一巻 フリーア美術館蔵

(十二)「風俗図巻」紙本着色一巻 徳島市立徳島城博物館蔵

(十三)「吉原風俗図巻」絹本着色一巻 『近世風俗図巻』第三巻(1974)収載作品、当時小田栄作氏蔵

(十四)「風俗図巻」紙本着色一巻 ウェストン・コレクション

(十五)「遊楽画卷」絹本着色一巻 岡田美術館蔵

(十六)「男女遊楽図巻」絹本着色一巻 『浮世絵派画集』第二冊(審美書院、1906)収載作品、当時九鬼隆一氏蔵

(十七)「春画卷(花の色香)」紙本着色一帖(元一巻か) 個人蔵 『春画と肉筆浮世絵』(洋泉社、2006)収載

二、署名「日本繪宮川長春圖」・印章「宮川氏」(朱文方印)

(十八)「水辺遊楽図巻」絹本着色一巻 チェスター・ビーティー図書館蔵

(十九)「春画卷(春の誘い)」絹本着色一巻 個人蔵 『春画 秘めたる笑いの世界』(洋

泉社、2003)収載

三、署名「日本繪宮川長春圖」・印章「宮川氏」(朱文方印)「長春之印」(白文方印)

(二十)「吉原風俗図」絹本着色三幅(元二卷) 日本個人蔵

四、署名「宮川長春」、印文不明(朱文鼎印)

(二十一)「桜見物図巻」絹本着色一卷 新健康協会清明会館蔵

五、落款未詳

(二十二)「四季遊楽図巻」絹本着色一卷 三越呉服店旧蔵(焼失、『國華』184号収載)

他に、「十二ヶ月風俗図巻」(模本、紙本着色一卷 国会図書館蔵)などあり

「江戸風俗図巻」絹本着色二巻 城西大学水田美術館蔵 享保期(一七一六～三六)

上巻：三一・九×五八七・九 cm、下巻：三一・九×五九一・九 cm

歌舞伎風俗を描いた上巻と、隅田川の船遊びから吉原風俗を描いた下巻から成り、上巻が桜咲く春に、下巻が柳の茂る夏から楓が色付く秋の景となっているので、春夏秋の三季に対応している。長春の画卷としては最も長い部類に属し、(二十)「吉原風俗図」および(八)「歌舞伎風俗図巻」より後の制作と見られることから、長春の最終的に到達した作例と考えられる。

上下巻とも三段(三紙)構成で、上巻の第一段は、芝居茶屋と、芝居茶屋の門前を描く。芝居茶屋の庭に面した座敷で野郎帽子を被り、客の相手をしているのは、若衆方・女方および色子と呼ばれた若い役者である。その左は、茶屋の門前の光景。門前には二人の役者が立ち、入ろうとする武士を迎えているようにも見える。続いて、挟箱に入れた贈り物を取り出す奴、馬を引く奴などが描かれている。この門前の情景は、菱川師宣の同様の景を描いた画卷・屏風などに類似のものを見出すことができる。さらに左には、劇場に向かう人たちがいるが、それは、続く芝居小屋前の景の導入となっているのであろう。

上巻第二段は、橘紋の櫓を揚げた市村座の内外である。舞台では、上手寄りに烏帽子狩衣姿の武士が葛桶に掛け、扇を持った手を差し出して、練り出す役者を招いている。踊りながら舞台中央に進むのは、女方と若衆方の役者である。棧敷は、上手側、下手側の両方にあり、上手側は一層で下が吹き抜けとなっている。下手側には、大黒頭巾を被った隠居らしい武士が見物しているところに女方役者が杯を差し出している。両棧敷ともかなり広い。舞台の下の土間で見物する様々な人々の図像は、師宣の作品と共通するものが多い。

上巻第三段は、楽屋の内部である。中央の板の間とそれに続く一段と高い畳敷きの間の左右に大部屋がある。それぞれ、着付けをしたり、髪を整えたり、囃子や謡の練習をしたり、立ち廻りの稽古をしている。奥の部屋では、大葛籠から衣裳を取り出す男、鼓の皮を暖めている男、手を洗う男、そして優雅に茶を点てている若い役者を描いている。

本画卷の上巻が、ジェノヴァ東洋美術館蔵「歌舞伎風俗図巻」(紙本一卷)とほとんど同じ図様であることは、『秘蔵浮世絵大観 ジェノヴァ東洋美術館Ⅰ』の解説で服部幸雄氏が早くに指摘されている。ただし、ジェノヴァ東洋美術館本は、本巻の第一段に相当する部分が最後に配置され、第一段の劇場に向かう人たちから市村座の外の景までと、第二段の隠居の武士の左から第三段の冒頭の衣裳箱の部分がないなど、本画卷より少し短い。細部も微妙に異なるのはいうまでもない。

下巻は、隅田川風俗、日本堤から吉原の路上風俗、吉原の揚屋の遊興の三段（三紙）構成であり、「吉原風俗図」と共通する図様が多い。

下巻の第一段は、隅田川畔を歩む人々から始まる。それに続いて、柳、屋形船、料理舟、吉原に急ぐ猪牙舟が描かれている。元禄の前後、十七世紀後期から十八世紀前半に、大名・旗本などは隅田川に市中の踊子などを呼んで遊興、幕府から度々禁止されているが、この図の屋形船のありさまは、そういったものを背景に描かれたかと推定しておきたい。屋根の上であくびをする船頭、猪牙舟に身を伏せながらも編み笠の割れ目から前を見る武士の姿がユーモラスである。東岸の風情ある建物はどこも特定しにくい、早くも木々が紅葉している。下巻第二段は、日本堤から衣紋坂、五十間道と来て吉原大門に至り、仲の町と格子見世前の情景、遊女道中とそれを見物する人々である。衣紋坂、五十間道とそこの編笠茶屋の景が、「衣紋坂網笠茶屋図」（絹本着色一幅）と似ている。そこから左は、「吉原風俗図」とほぼ同じ図様である。ただ、仲の町図などは、人物を減らすなど全体を整理し、濃密な印象を薄めるとともに、手慣れた筆致が軽快感を高めているように思われる。下巻第三段は、揚屋の遊興のありさまで、揚屋入口と内証の図に続く図様は、「吉原風俗図」とほぼ同じ図様である。ただ、「吉原風俗図」の大きな衝立と紅葉した木をなくすなど、ここでも図像の整理は行っている。

本巻の箱書きや巻の見返しに捺された印章によると、高松市塩屋町の徳田雄三郎が明治二十四年十一月五日に購入し、しばらく所有していたことが分かる。

## 長春の画卷の主題別分類

### 一、四季風俗

菱川師宣の四季風俗図巻を継承し、最も多く制作されたと思われる主題

個人蔵の「初春風俗図巻」とジェノヴァ本「街頭風俗図巻」の図様がほとんど一致

両者とも紙本で、前者は 32.1×376.5cm、後者は 33.5×390.6cm 前者は春秋、後者は春の一角。長春が独自に構成し、自身の得意の図様に昇華させた作品。

### 二、十二ヶ月風俗

十二ヶ月風俗図巻は、四季風俗図巻の一種とみることできるが、四季風俗画卷と重複しないと思われるため、別に立項

### 三、吉原風俗

### 四、芝居風俗

劇場図……水田本の上巻、ジェノヴァ本「歌舞伎風俗図巻」

東博本「風俗図巻」の最終場面である楽屋風俗が水田本の楽屋図と類似

座敷芸図…東博本、女舞の一行か？

ボストン本「遊楽図巻」……東博本とほぼ同じ構成の歌舞伎の観劇図

楽屋風俗は、東博本以上に水田本・ジェノヴァ本と類似

ウェストン・コレクション「風俗図巻」……吉原での観劇図

### 五、室内風俗

長春独自のスタイル

### 六、春画

一巻、十二図構成を基本とする

## 長春の「業平東下り図」と「形見の駒図」

「業平東下り図」 学校法人城西大学水田美術館蔵

『伊勢物語』第九段の、在原業平とされるある男の東下りを、長春独得の感覚で変容させた作品。業平東下りは、嵯峨本『伊勢物語』の図様、すなわち、馬上の貴人が富士山を仰ぎ見、周囲に長柄傘などの荷を持った仕丁たちを配するというのが、最も普及しているが、この図で業平に仮託されているのは、白地の打掛を着た遊女で、新造・禿とともに富士を仰ぎ見ている。そして、馬を牽き、長柄傘を持つ相応の歳の女性二人が配されている。

馬を牽く二人の女性を描く画題としては、『曾我物語』に依拠した「形見の駒図」があり、長春は、その作品も制作しているが、業平に相当する人物がいるか、長柄傘を持つ人が描かれているかが、判別するポイントとなる。

「形見の駒図」 静嘉堂文庫美術館蔵

「業平東下り図」に似ているが、こちらは、『曾我物語』から生まれた画題。曾我十郎と五郎の兄弟が工藤祐経を討ち、兄弟も亡くなった後、十郎の愛人の大磯の虎と五郎の愛人の化粧坂の少将が、兄弟の形見の駒を引いて行く情景である。虎と少将が駒を引くという場面を直接『曾我物語』に求めることは出来ないが、近松門左衛門作の浄瑠璃『世継曾我』（天和三年）には、曾我の里に向かう「虎少将道行」として盛り込まれている。太田記念美術館には無款の「曾我物語屏風」（紙本、六曲一隻）が所蔵されており、それにも「形見の駒図」が認められるので、その図様が『世継曾我』を直接的な典拠とするのか、あるいはそれに先行する物語や逸話があるのか未詳であるが、十七世紀に生まれた画題であることは確かであろう。画題の名称については、奥村政信画の古典を当世風にやつした横大判墨摺絵十二枚のシリーズ（MOA美術館蔵）のなかに「かたみのこま」と題された一図があるので、とりあえずそれに従う。

「形見の駒図」について、最初に指摘したのは、ミネアポリス美術館蔵の田村水鷗筆「裾野の駒引き図」の解説をした鈴木重三氏であるが、その後、山崎龍女筆「二美人駒引き図」（東京国立博物館蔵）も同一主題であることが判明した。また、それらに先行すると思われる古山師重筆の「形見の駒図」もある。

図の虎と少将は、長春描く遊女図と同様の風俗に作られている。右の女性が留袖、左の女性が振袖なので、右が虎、左が少将ということになるであろうか。本図以外の「形見の駒図」にはすべて富士山が描かれているが、長春は、富士に変えて柳を配している。

## 水田コレクションの浮世絵

川又常正「追羽根図」紙本着色一幅

無款「楼上遊宴図」紙本着色一幅

喜多川歌麿「遊女と禿図」絹本着色一幅

喜多川歌麿「音曲比翼の番組 小むら咲権八」間判錦絵

鳥園斎栄深「鷹匠」大判錦絵

菊川英山「風流狐けん」大判錦絵三枚続